

白鳥保護に半世紀の畠山正光さん

青森県平内町の“白鳥のおじさん”こと畠山正光さん（九二歳）・日本白鳥の会名誉会員の功績をたたえた胸像が同町の浅朝海岸に建立された。

“白鳥のおじさん”として知られている畠山さんは国鉄職員として小湊に赴任した昭和十九年二月から、白鳥の美しさに魅せられて観察・保護を始めた。同二十五年には転勤の話が持ち上がったため国鉄を辞職。以後、観察を続け、同三十四年に四年がかりのえ付けに成功した。

戦後の食糧難の時代にも「食うや食わずでやった」と振り返る畠山さん。看護婦だった妻富士江さん（七三歳）の支えもあって八十歳で大腸ポリープの手術をした年も休むことなく観察を続け、九十歳を超えた今なお寒風の中、白鳥にえさを与えている。

畠山さんの胸像建立計画は町内の若手リーダーの勉強会「水曜熱」の参加者から持ち上がった。五十年以上にわたって浅朝海岸に飛来する白鳥の保護を無償で続けてきた、畠山さんに感謝の気持ちを表すことはできないかと、町内に呼び掛けたところ、漁協や町内会、商工会などが快く協力を引き受けた。

昨年、五月には胸像建立協賛会が発足、商店街など十ヵ所に募金箱を設置し、寄付を募ってきた。

町内外からの善意でできた胸像は、ブロンズ製で高さは約七十センチ、黒御影石の台座部分を合わせた高さは地上から二百七十七センチになる。当初は胸に勲章を付けた正装姿で計画が進められていたが、畠山さん本人の強い希望でいつものアノラックに帽子をかぶり、双眼鏡をぶらさげたものに変更、いつも白鳥を観察している平内白鳥観察所の前に建てられた。

除幕式は五月二十五日に行われ、畠山さんと妻の富士江さん、長女睦子さんが出席した。除幕式の前に、活動を陰から支えた富士江さんは「多くの方が協力してくれて本当にありがとうございます。つくづく畠山は幸せだなと思っています」と感謝していた。

「欲や仕事だったら五十年は続けられなかった。今は浜で白鳥を観察しながら最期を遂げられたら本望」と畠山さんは話す。

【編集委員注】この文章は、東奥日報の新聞記事を参考に、会誌編集委員が加筆したものです。



除幕した胸像のそばに立つ畠山さん